

軍法及び物見

軍法とは、軍中に定めておくところの諸法度である。軍法が厳正でなければ、人数（＝複数の人々・兵たち）が一致した力を出さないものである。総じて軍とは大勢の兵員を一身のように動かすものであるから、軍法を嚴重にして行動を縛らなければ、斉一にはならない。よく兵を用いる者は、例外なく法を嚴重に定めている。日本の軍は法度が粗いので、斉一にならない軍が多い。左に法の大略を記す。將たる人はよく会得して工夫すべきである。

○ほら貝や太鼓の音を聞いたならば、前に劍の山があっても進まねばならない。進まない者は斬って棄てるものとする。

○鉦（＝鐘）の音をきいたならば、目の前に簡単に取れる首があつても踏み止まらねばならない。止まらない者は斬る。

○傍らにいる者同士は、相互に危機を助け合わねばならない。とりわけ頭（中・下級指揮官）格、大将格の危機を見捨てる者は斬る。

○物見の張番、又は夜番等に当たつてその職を怠り、あるいは居眠りし、又は守り場を立退く者は斬る。

○血戦（＝白兵戦）の場において鐘を鳴らさないのに自ら退く者は斬るものとする。

○城攻めるときに攻め登るべきところを攻めかねている者は斬る。

○籠城のときに妄りに自己の持ち場を退く者は斬る。

○根拠の無いことを言い出して、味方の気を動揺させた者は斬る。

○敵と書面で通じるのは言うに及ばず、音信贈答し、あるいは妄りに敵と言葉を交えた者は斬る。

○首（他者が討ち取った首）を盗んだ者は斬る。

○人が討った敵を、脇から理不尽に奪う者は斬る。

○公用ではなくして、妄りに自己の持ち場を去り、あるいは陣小屋等から離散する者は斬る。

○約束の時刻、日限等に遅れて来る者は斬る。

○私事で相争って大声を出し、あるいは刃傷にんじょうに及ぶ者は、双方ともに斬る。

○妄りに先懸けしてはならない。これを犯す者は斬る。

○身に着けて携行すべき武器を紛失した者は、問いただした上で斬る。

○忍び足で陣中を通行する者は縛る、あるいは斬る。

○妄りに備の中を走り回る者は縛る。

○妄りに大声を出す者は縛る。再犯者は斬る。

○軍中での飲酒を禁ずる。これを犯す者は縛る。再犯者は斬る。

○博奕ばくちは云うに及ばず、妄りに賭けの諸勝負をする者は縛る。再犯者は斬る。

○馬を取り放して備を騒動させた者は、馬を取り上げる。

○味方に敵と内通する者がいると聞き出したならば、速やかに総大将に報告せよ。

遅々として報告しないのは有罪とする。又、事によっては即座に斬る。

○身に着けて携行すべき武器が不調の者は、問いただした上で斬る。不調とは弓があっても弦が無く、鉄砲があっても引金が破損している類を云うのである。この類のことは、全て武士としての大不覚である。

○商売婦女（＝売春婦・娼婦）の類と妄りに言葉を交わす者は縛る。再犯者は斬る。

右は罰法の大略である。さらに将帥の考えにより、又はその国の風土等を考慮して最良のものを定めよ。又、軍法には賞すべき条々もある。左に大略を記す。

○先手が敗北して、すでに総崩れになりつつある時、守り抜き、敵を押し返して味方が敗北しなかったならば、その守り返した者を上功とする。

○敵の主将を討ち取った者は上功である。並びに大将格の者を討ち取ったのも上功に準ずるものとする。

○攻撃開始時に一番槍を入れた者は上功である。

○後退時のしんがり殿は上功である。

○味方の大将格の首を敵に取られたとき、その首を奪い返した者は上功である。又、大将格ではなくても、敵に取られた味方の首を取り返した者は功とするものである。

○味方の軍旗、鐘、太鼓の類を敵に取られたとき、奪い返した者は上功である。

○主将は云うに及ばず、大将格の者の危機を救い、又は自分の命に代えた者は上功である。厚く子孫に報わねばならない。

○川を渡るのに、瀬踏み（＝先頭で浅瀬を足で探りつつ進む）した者は上功である。

○城攻めに一番乗りした者は上功である。

○主将は云うに及ばず、大将格の者が敗走するとき、その身を離れずに本国まで付き従った者は上功である。

○敵方に間かん（＝スパイ）に遣わして敵の計略を聞き出して報告し、それを知って逆に味方が謀計をなして敵を破ったときは、間として行って来た者は上功である。

○敵の間者を捕獲した者は上功である。

○敵の軍旗、鐘、太鼓、帷幕いまくの類、総じて敵方の武器を奪い取った者は功である。

○籠城中に城外に使いとして出て、その任務を遂行した者は上功である。

右は賞法の大略である。この賞罰を総じて軍法と云うのである。さらに工夫し、よく考えて法を立てねばならない。しかしながら軍法は細密にわたり箇条が繁多であるのは好ましくない。ただ肝要な事だけを少ない箇条で定めよ。もちろん定められた法は、少しでも違反することがあってはならない。全て法令は違反のないことを主意とするのである。違反が頻繁にあれば、法が軽くなる。法が軽くなれば、人は恐れなくなる。人が恐れなくなれば、法を守る者がいなくなって、齊一ではなくなる。不齊一は兇戯の軍立てであると理解せよ。将たる者は、法を厳しくしないことがあってはならない。そうは云えども、法をこそ厳格にせよ。我が意を厳格にしてはならない。福島正則のごときは、我が意の厳格なるがゆえに国を失ったと云うものである。「功は疑いこれ重く、罪は疑いこれ軽く」と云うのは、聖人の法にして実に意味深いことである。将帥たる人は、このことを忘れてはならない。将たる者は、法を厳しくしないことがあってはならない。そうは云えども、法をこそ厳格にせよ。我が意を厳格にしてはならない。福島正則のごときは、我が意の厳格なるがゆえに国を失ったと云うものである。「功は疑いこれ重く、罪は疑いこれ軽く」と云うのは、聖人の法にして実に意味深いことである。将帥たる人は、このことを忘れてはならない。

物 見

○物見は軍の肝要なものであり、勝敗に関わるところなればこそ、最も重視しなければならぬ。先ず物見には大中小の三段階がある。大物見とは総大将が直接に物見す

る事である。中物見とは侍大将、番頭等がなすところである。小物見とは一〜二騎が出て物見することを云う。

○中物見以上は、直に取合い（戦闘）になることがあり、覚悟しておかねばならない。覚悟とは武器を備えておくことである。新田義貞の足羽合戦あすわにおける大物見では、事を軽々しくしたことにより大変な目にあってしまった。慎重に行動せねばならない。このように物見から直に取合いになったときは、そのことを本陣に知らせる役目が定めてあらねばならない。

○小物見に出たとき、敵から勝負を望む者が現れたならば、主任務として物見に出てきたので、先ずは帰来して報告することを優先し、「すぐに馳せ来て勝負しよう」と言って、互いに名乗り合い、かつ鎧、指物等を相互に見覚えて立別れよ。それでも、実際に帰来して勝負を決するかどうかは、当時の相手の様子による。帰来しなくても大きな恥辱にはならない。これらは大將の命令次第なのである。一方で前述のように訳を語っても、敵方が承知せずに攻めかかるならば、その時はやむなく無二無三に戦って勝負を決せよ。それでもこのやり方は十中八九好まざることであり、物見としての任務を主とすべきである。ただし、三人ならば二人は勝負をなし、一人は帰来してその状況を報告することもあるだろう。これも又、当初から帰って報告する役目を定めてから行なわねばならない。

○つなぎ物見と云うのがあり、遠方の所に用いる。これは数箇所の人をつなぎ置いて、段々に伝言し続ける方法である。場先の事を早く本陣に報告するためである。

○支那、オランダの軍事は、大小ことごとく物見を用いる。そうであるから粗忽そこつ（不注意から起こした過ち）により敗れることがない。日本の軍事は物見について甚だ

粗く、必要な時だけ計画し、物見を用いるのである。これゆえに戦に強いとされる大將も、足元から不意の動乱を受けてしまうことが多い。武田信玄の本陣が上杉謙信に攻めかかれ、今川義元の旗本が織田信長勢に切り込まれたのは皆、物見に粗かった事例であると理解せよ。

○大小ことごとく物見を用いると云うのは、備を張って敵と戦を交えるときは勿論のこと、行軍にも前後左右の物見を用い、又、陣営を設けている途中でも四方の物見は怠ることがない。その他にも万事皆、物見を用いるのである。実に慎重である。

○敵地の深くまで物見に行くには、あるいは商人となり、あるいは草鞋わらじを（前後）逆に履き、又は獣足を作って履くこと等もあるという。さて又、物見に出て何を見極めるかについての習わしがある。左にその大略を記すが、さらなる工夫が必要である。

○敵国の貧富、強弱、又は士民が国主に服従しているか、服従していないかの様子、あるいはその主將の氣質等かたぎを観察することが最も重要である。

○敵の虚実を見よ。虚とは部隊が整列せず、旗手が動き、軍士が妄りに四方を見廻し、あるいは所持している武器を玩もてあそび、又居敷おりしきもせず、あるいは首が空を仰いで胃の内側が白く見え、あるいは武者がよそ見や雑談しているのは皆、虚である。

○実とは部隊が整列して、皆が居敷し、又視線を下げて妄りに五体を動かさず、所持している武器を玩もてあそばず、旗手は立派であり、妄りに声を立てないのは皆、実である。○敵地に入ったならば、先ず予想される戦場をよく見ておくこと。地形には順と逆がある。これについては第九卷目（正しくは「第十卷目」）地形の条に記す。

○敵勢が多いか少ないかを見積もれ。これは平素から見て習得しなければ、見積るのが難しいものである。操練の時に意識しながら見て習得せよ。

○敵の備の形を見極めよ。攻撃箇所（敵はどこに攻めてくるか、我はどこを攻めるか）を解明できるからである。備の形とは魚鱗、鶴翼、鋒矢等の形を云うのである。

○騎馬が多く歩兵が少ないか、騎馬が少なく歩兵が多いか、その様子を見極めよ。

○山や川などで嶮しく通過困難な場所を見極めよ。

○敵と我の間が何町であるかを見積れ。これも平素から見て習得していなければ、見るのが難しいものである。心がけておくこと。

○田が浅いか、深いかを見極めよ。畦が崩れているのは深田である。田植えの並びが不ぞろいなのは深田である。刈った穂が長いのは深田である。総じて水国の田には深田が多いことを知っておけ。

○川があれば渡れる箇所を見極めよ。川底が石であれば、広く平らで大石が無い所が浅瀬である。川底が砂であれば、直線の所に浅瀬がある。長刀なぎなたのように曲がっている

所は川底が掘れて深いものである。泥川は狭い所が深くなっている。岩川は滑るものである。これらが大概の見極めであると云えども、様子を知らない川は、案内者を用いることが第一の心がけであると知れ。

○伏兵が籠っている場所を見極めよ。これ又、習わしがある。森林等で鳥が飛び騒いでいるのは、その中に伏兵がいるからである。獣が驚いて走るのは、伏兵がいるからである。飛ぶ鳥が驚き、行雁が列を乱すのは、伏兵がいるからである。森や藪等の近辺の草を踏みにじられているのは、伏兵がいるからである。草野に虫の鳴く声が無いのは、伏兵がいるからである。これら数条は伏兵を察知するための概略である。

○敵と対陣しているときは、敵陣に日中立上るところの飯煙めしけむりが多いか少ないかをよく見覚えておくこと。通常よりもかなり多いのと、通常よりもかなり少ないのは、敵

陣で何事かの準備をしているのである。よく注意して通常より多いか少ない飯煙ならば、間者を遣わして細密に敵の様子を探れ。武田信玄と上杉謙信が川中島で対陣した時、武田軍の飯煙が通常よりもかなり多いのを上杉方から発見され、武田が部隊を廻すことを察知した事例もある。このことを思い出せ。

右は物見の大略である。先述したように、物見は勝敗に係わるものなればこそ怠ることがないようにせよ。特に前進、陣取り、細道等では、念入りに物見をすべきである。

第三卷終